

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

john

3

10月号

MONTHLY MAGAZINE KOBEKKO OCTOBER 1961 NO. 8

Refine NIKKETEX



高級紳士服地

リファインニッケテックス



竹馬産業株式会社

元町通三丁目 ③ 5521~5

美しい
店で
楽しい
お買物



どこよりも良い品を どこより安く どこよりも親切に



神戸店

電話③8121

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です



神戸の女性



秋風を切る

快適なドライブに

コンテッサ

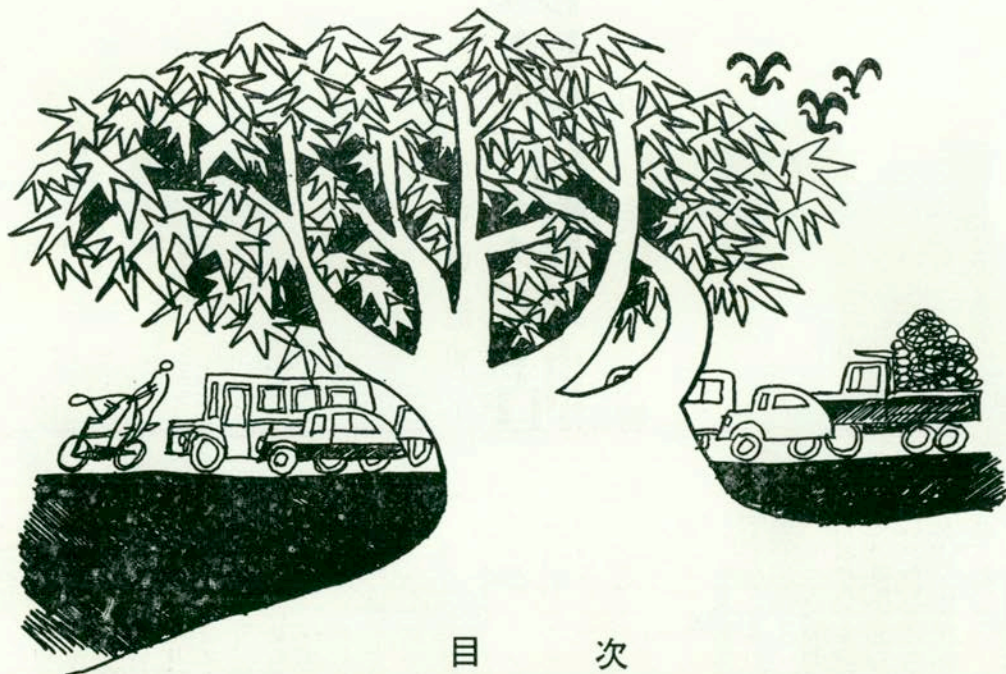


Hino

コンテッサ

神戸日野自動車

TEL. ④5771-5



目 次

PHOTO / 神戸女性・杉尾友士郎	1	24 PHOTO・詩 / 秋の装い	
れんさい随想④ / 秋風銀髪帖・阪本勝	4	26 ことしのパリモード・福富芳美	
連載第7回「ここに神戸がある」		28 座談会 / おとこのオシャレ	
南京町・司馬遼太郎	8	33 AUTUMN FOR MEN, S WEAR	
神戸っ子放談 / 直木太一郎	12	35 SHOPPING GUIDE	
ずいそう / 夏から秋へ・梁雅子	16	38 特集・うまいものシリーズ No. 8	
映画戯評 / ブラックタイツ・黒木ひかる	18	わが愛しの神戸のトマリ木	
花時計・レリーフ / 松井高男・伊藤誠	21	46 BONSIOR MADAME	
1店紹介・永田良介商店	22	47 ずいそう / 浅酌微醺・及川英雄	

表紙 / 藤田嗣治・カット / 中西勝・写真 / 杉尾友士郎・米田定蔵・デザイン / 橋昭三

れんさい随想 ④

秋風銀髪帖

阪本 勝

いつの年の秋だったか、県庁近くの市電の停留所あたりを通りかかったとき、プラットで本を読みながら電車を待っている中年の婦人を見かけた。

横顔の気品が高く、銀髪が秋風にゆらいで、きらきら光っていた。すくなくらず心をひかれたので、正面から顔を拝ましていたらどうと、わたしは物好きにも電車道の向側にわたり、しみじみとその姿に見入った。

ゆるやかなウェーブの髪を幾すじかがくつきりと秀でた額にかかり、秋風のなぶるにまかせていた。

眼鏡の奥に切れながの眼が見えた。女性の服装についてはきわめて鈍感なわたしにも、その婦人の和装がたもとの短かいニュー・キモノの一種であることはわかった。年格好は四十を出て五つ六つというところだったか。やがて来た電車はかの女を吸い入れて去った。

ただそれだけのことだったが、狭い神戸なのに、その後ふたたびその婦人を見かけたことがない。

だがあのときの印象は妙に強くわたしの脳裏に刻みこまれて、わたし自身が作りあげた女性のイメージの一つになってしまっている。

中年または初老のインテリ女性の銀髪というものは、ほんとうにいいものだ。だが銀髪の冴えはかならず知性美とともにある。

この条件が欠けると銀髪はむしろ白髪というべし、なくもがなと思われる場合が多い。

◇ そこで「神戸っ子」の読者とともに考えてみよう。

われわれの身边で、社会的舞台にいる人で、知性美豊かに、銀髪の美しい中年初老の女性をもとめるとしたら、いったいどんなミセスまたはゴケス（後家）があるだろう。これからちよつと失礼な話になって恐縮だが、まあ悪く思いなもうな。

かりに三人あげるとしたら、わたしはちゆうちよなくつぎのミセスとゴケスをえらぶだろう。

アメリカ文化・スターの星野富士子さん、県教育委員の広岡貞子さん（以上ミセス）、社会党所属の神戸市会



議員、吉村とくさん（以上ゴケス）の三レディがそれである。

星野さんと知りあったのは、わたしが知事に就任してからだから、約七年になるわけだ。この間星野さんの銀髪はとみに光を加え、美しさを増したように思う。

それは浮世の苦勞なんてケチなものではなく、知性の深まりや思慮のこまかさなどを象徴するものだろう。

星野さんの英語はじつにあざやかで、蔭できいていれば日本人と思わない人が多いだろう。

さる七月下旬、西ベルリンでもとのアメリカ文化センター館長のバスキン博士夫妻から昼食に招かれたが、バスキン夫人は、世界中の女の友達のなかでホシノさんがいちばん好きだとしきりにホシノ熱をあげていたのはいずれなすけた。

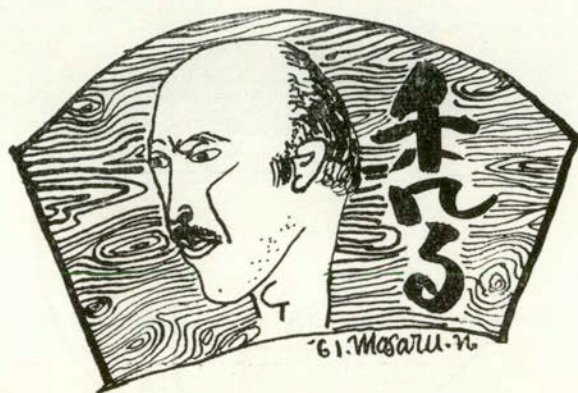
広岡さんの場合は知性美の要素となっているばかりでなく、威厳の発光源ともなっている。こんな話がある。

神戸高校の校長室に「温良貞淑」と書かれた額がかかげられてあるのを見たYという高教組の幹部が「温良貞淑なんていう額を校長室にかけておくのはけしからん」と広岡さんを責めたとき、広岡さんはいとも静かに「温良貞淑がなぜいけないんですか」といった。すると相手はそのまま黙ってしまった。一座のものはすっかり感心したそうだが、これこそ銀髪に象徴される女性の神秘な威厳とでもいうべきものだろう。

吉村さんは酒を全然飲まないが、無理にすすめられてコップの三分の一ぐらいビールをすすると、たちまち顔が赤く染まる。「その瞬間が何ともカンともいえないほどあだっばい」というのが中井一夫さんの述べだが、それはともかくとして、世上稀に見る端正な知性美が赤く映える数カットは、白梅から紅梅に眼を転ずる瞬間に似てあつと声を出したくなるくらい。

◆ 三女史とも眼鏡をかけてござる事をつけ加えておく。

神は女性に陣痛という苦を背負わしたもうたかわりに



男性には禿頭という恐怖を課したもうた。男性には陣痛の苦しみはないが、女性には禿頭の不安がない。神は平等である。

だから女性にとってもっともたいせつで誇るべきものはふさふさとした髪であるはずだ。

しかも中年ごろからその黒髪が銀色に光り出し、ある種の女性においてはその知性美を引き立てるというにいたっては、われら男性にとって羨望のかぎりである。

とりわけ蕭々たる秋風にゆるやかなしろがねの波がゆらく風情などは、女性の生涯を通じて最高の場面であろう。女性にとって銀髪はかならずしも老いのしるしではない。それは尊い経験と良識が積みかさねられてゆく人生の道標なのだ。

悲しいかな、男性は頭髪あまりに短かく、ロマンス・グレイなんて威張ってみても、タカが知れているし、全白組は竹中郁君や社会党の江田君のように、パサパサでウェーブの風趣に欠けている。

しかも多くの男性は、青年期を過ぎればつるつるてんの恐怖に直面しなければならない。

女性こそ陣痛を担保にしてしろがねの幸福をかち得たのだ。にくらしきこと言わんかたなし。

書き忘れてならんことが一つある。

欧州から帰って知った松村小琴の死、

あの琴の糸がまだ切れていなかったら、かの女のあのすばらしい銀髪をこの舞文の一節に登場せしめたのであるものを。

(兵庫県知事)

FUGETSUDO

お慶びの日に

御引菓子
御土産
和菓子
洋菓子



御婚礼御菓子ご相談お待ち申上げております

創業 明治三十年



風月堂

神戸・元町三 TEL. 神戸 ③ 695・696



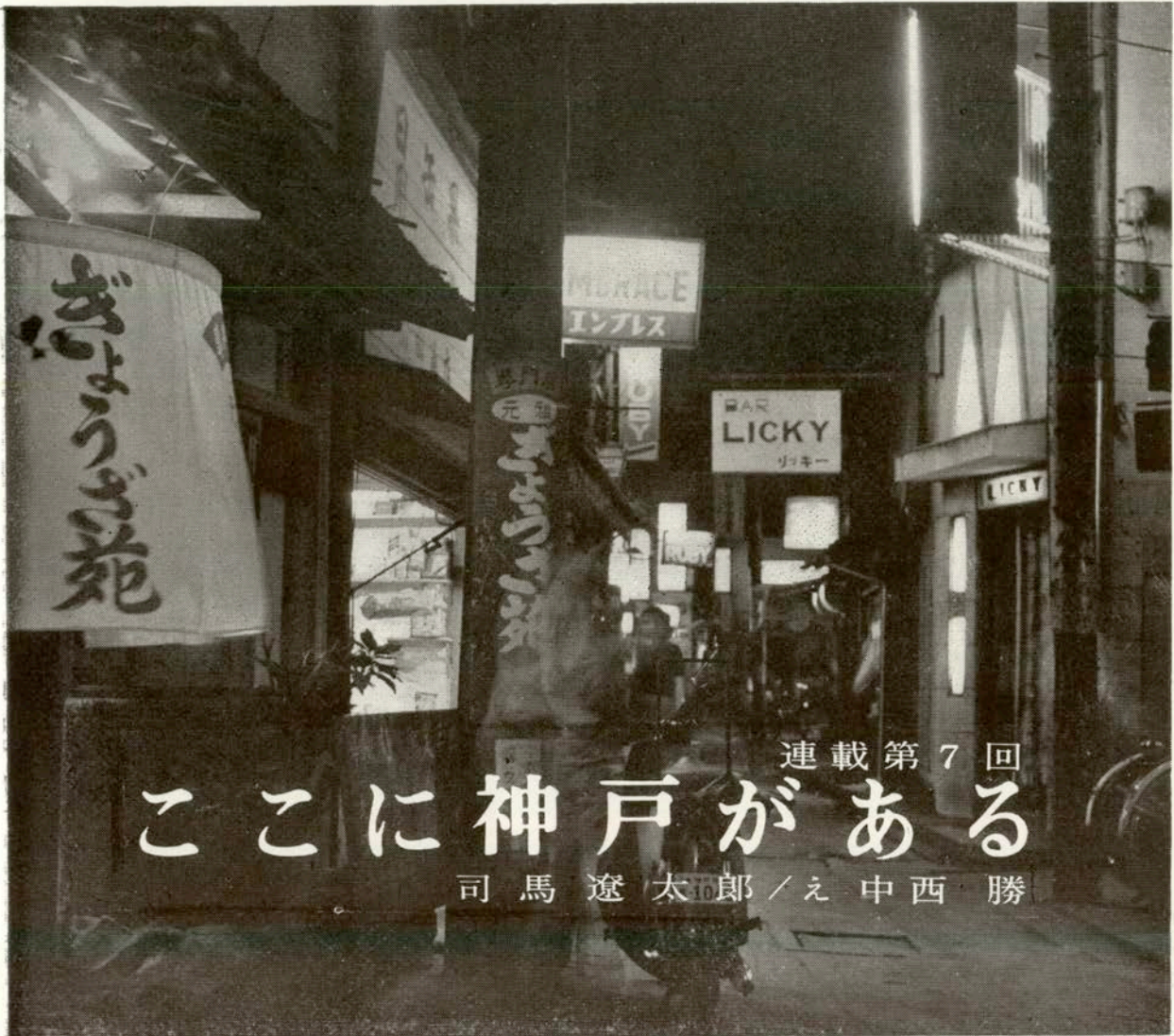
お慶び近いあなたに
気品をそえる真珠



北村パール

北村真珠株式會社

神戸／元町2・東京／スキヤ橋センター
TEL ③ 0072 (571) 8032



連載第7回

ここに神戸がある

司馬遼太郎／え中西勝

南 京 町

この夏、山中湖へ行ったもどり、横浜へ寄って南京町で夕めしをした。これが南京町か、とおもうほどに豪華な町になっていた。中華料理の大きな町がずらりとならび、店の設計がとまどうほどにモダンだった。

安くてうまいというのが南京町の料理の特徴だから、家族ずれの客が多く、室内装飾も日本化され、味もおもいきって日本的になっている。つまり、「通」と絶縁した地点から、横浜南京町は異様な発達を上げた。なんといっても、こんにちは、大衆資本主義の時代なのだ。できるだけ多数の人から小銭をかきあつめる商売のやりかたが、成功したのだ。

しかし、神戸の南京町はちがう。

この町にはまだ、証券やデパートや電器メーカーのような「大衆資本主義」の波はまだやってきていない。

まだまだ「通」の町なのだ。

だから、ここの食べもののうまさは、食通雑誌にはずいぶんほめられている。どの店も、食通にはめられるだけでホクホクとよろこんでいる感じだ。そのかわり、横浜の南京町のように、京阪神の大衆を動員しようというような大それた望みはもっていないようにおもわれた。

×

この日、例によってまず五十嵐さんと会った。

「きようは南京町」

と五十嵐さんはいい、

「二人の権威者に案内していただくことになっています」

そのひとりが元町一丁目の「蛸の壺」の木村憲吾氏であり、ひとり兵庫新聞論説委員の竹田洋太郎氏だった。

木村さんとは先月お会いしたばかりだが、竹田君とは二十年ぶりのめぐりあいである。

大阪外語にいたころ、かれはスペイン語科におり、私は蒙古語科にいた。

私にとって、大阪外語のころの思い出はちっとも楽しいものではなかったが、それでも竹田君に会うことは、二十年前の自分に会う

ようなおどろきとうれしさがあつた。

「ほくの顔おほえてる？」

「おほえてるとも」

と竹田君の顔をみているうちに、不意に、その当時流行した歌のメロディがおもいだされた。たしか「ヤマノサビシイミズウミニ、ヒトリキタノモタノシイコロ」という歌詞で、あとはおほえていないが、そのメロディが、湧くように耳の奥にきこえはじめたのである。

べつに竹田君の顔にメロディがくっついていたわけではなく、私は竹田君の顔に自分の青春の顔をおもいだし、その顔の背景にそういうメロディが鳴っていたのだ。当時、町の映画館も喫茶店も、ひとつおほえのようにそのレコードをかけていた。

木村さんが、

「まず、中華料理の材料屋さんに行ってみましょう。ずいぶん妙なものがありますぜ」

なるほど、店に入ってみると、見ただけでは正体のわからない食品が、さまざまな容器につめられてならんでいる。

いちいちの食品の名はわすれたが、その一つ一つが、私のような気の弱い非食通からみれば、ささやかなスゴミを感じさせる個性をもっていた。

中国人のえらさは、この地上あるすべての非毒性の動植物をみごとな食品に仕立てあげるところにある。すでに漢の時代に鯉の料理法だけで百種類以上もあったというから想像もつかない民族であるもしかれらが、宇宙船で月世界へゆくとしたら、最初に考えることは、月をデンプラにすべきか、スープにすべきか、ということかもしれない。

そこへゆくと、日本人などはタカが知れている。

広東人は悪食だというが、日本の信州人や東北人も、それにおとらぬ悪食なのだ。

私は外語のころ、福島県出身の同級生がいて、福島県の田舎では、ネコをころして軒端につるしておくとか三日でうまくなるといった。

私はおどろいて「福島県ではネコを食うのか」というと、先方はさらに眼をまるくして、

「大阪ではネコを食わねえのけ？」



といった。

信州へゆくと、宿屋でも、カイコのサナギをツクダニにして食膳に出す。へびも食う。

信州では、へびが道ばたに迷い出てくると、いい娘さんが歓声をあげて追っかけるというから、りっぱな平常食なのだろう。

そのくせ、東北のネコ料理や信州のへび料理がうまいというはなしをきいたことがない。つまり、調理法が原始的で、とうてい他郷の者を魅了するだけのものをもっていないのである。

「とにかく、中国人はすごいですよ」

と、中国通の木村さんがいった。

そのあと、竹田君につれられて、南京町の露地から露地へとあるき、「河童天国」でギョーザをたべた。なるほどうまい。

竹田君は、関西学院中学のころからの食道楽家で、このあたりのウロツキには二十年のキャリアーがあるという。

「神戸は食通の町やな」

というと、

「うん。たしかに大阪よりはうまい。しかもやすい」

たしかに南京町は通の町だが、しかし京阪神の大衆の中で〇・一%も通はいない。

その〇・一%程度をよろこばせている「商仙」のような連中が神戸の町にまだたくさんいるからいいものの、もしたれかがそのなかに当世流の「大衆資本主義」をもちこんだとき、神戸の南京町はたちまち横浜の南京町になってしまうだろう。

それがいいかどうかは、私にはわからない。

(作家)

